

NDAY NIKKEI

今を
読み解く

四半世紀も前のことだが、北米や欧州を長期日程で訪ねたことがある。最初の滞在地で買った『Urban Utopias in the Twentieth Century』(20世紀の理想都市)を読みながら旅をした。E・ハワードら英仏米の都市計画家・建築家の提案が実現したり、都市形成をリードしたりしたという意味で、理想が実現したと捉えた本だった。

ハワードは田園的な風景と新しい産業である工業を備えた都市を理想とした。ロンドン郊外にニュータウンを創り、世界の郊外ニュータウンの先駆けとなった。高層のオフィスビルやアパートによる立体的な都市を提案したのはル・コルビュシエで、大都市中心部のモデルを作った。ライトは数千平方メートルというゆたかりた敷地の住宅地を提唱し、米国などの郊外住宅地のモデルとなった。

これらの都市を実際に訪ねると、今日では日本でも見慣れているように、都市には高層ビル、郊外には自然豊かな住宅地が広がるという風景が20世紀の理想だったと実感した。

●見直しの好機に

では21世紀の都市はどうあるべきか？ 実は、これまで理想と想ってきた都市は危機に直面している。

エネルギー分野で温暖化ガス

人口減少時代の都市像

基盤となる産業の再生を

豊橋技術科学大学学長

大西 隆



ず、老朽化するインフラの維持管理や都市の更新をいかにして行つかも課題である。

2020年東京五輪の開催を控えて、日本には都市作りを根底から見なおす好機が訪れているといえるだろう。世界に先駆け、都市の存亡をかけて21世紀の都市のあり方を模索する思考と実践が始まっている。

タイムリーな古典の文庫復刊にジェイン・ジェイコブスの『発展する地域 衰退する地域』(2012年)がある。都市を成長させる産業とは何か、日本の各

地が自問自答している。輸入置換、つまり外から買っている物を地域の資源によって作ることに始まり、刺激的でもある。理論と実践について具体的な

のが中村良平の『まちづくり構造改革』(日本加除出版、14年)である。都市の存立と発展に有効な産業構造をそれぞれの都市が見いだすための戦略を、産業連関表による分析を通じて考

え、実践する方法を提示する。域外にも市場を持つ移住型産業の育成、域内の経済循環、さらに域内産業への投資に関する分

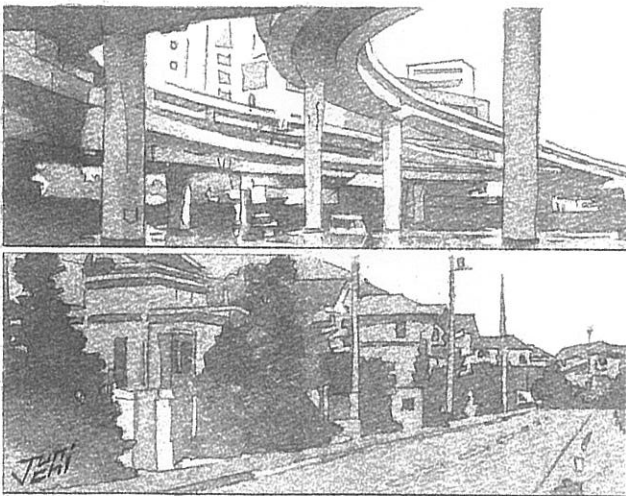
析と指針の立て方を分かり易く説いている。

●質の向上が重要

人口減少時代には都市を漫然と縮小するに委ねるのではなく、都市の質的な向上につなげるにはどうすべきかということが重要である。谷口守の『入門都市計画』(森北出版、14年)は教科書仕立てではあるが、読み物としてみるとそのメッセージを発している。災害の危険が高い場所や不便そうな場所から撤退し、安全で便利な場所に集まって住むには、どういうメカニズムを働かせるべきかを考える上で示唆に富む。

小田切徳美の『農山村は消滅しない』(岩波新書、14年)は、人口減少が進む見通しの下で、安直に喧伝される感のある「農山村消滅論」に敢然と反論する。高齢化がいち早く進んだのは事実であるが、その中で、重心を低くして前進する地域の人々の姿と、若い世代の間で農山村への関心が高まっているという変化の兆しを、豊富な地域調査を踏まえて報告したものであり、説得力を持つ。

21世紀の理想都市は、日本では、逆都市化時代の都市の在り方、つまり人口減少に対応した縮小した都市像を提示することが肝要となる。そうした新たな枠組みの中で都市を中心とした地域の活性化をどう図っていくのか。基盤となる産業の再生や集住にその可能性はあるが、多くの都市では、まだ準備ができていない感がある。しかし、時代は着実に変わりつつある。理想像の転換と目標への到達方法の確立が急がれる。



理想と思われる20世紀型都市は危機に直面している
イラスト・よしおか じゅんいち